トヨテック

▼ミマキ製プロッタ採用モデルを追加

㈱トヨテック（千葉県野田市西三ヶ尾、豊田保社長）はこのほど、ミマキエンジニアリング製のカッティングプロッタを採用したロール・ツー・ロール方式の後加工機「DGR−350／Plus」の開発を発表した。極小〜小ロット向けの後加工を想定した同モデルは2月に東京・池袋で開催した「page 2024」の会場で先行披露。高評価を得て、デジタル印刷後のエントリータイプの後加工機と位置づけのもと、今春から本格販売を開始する。

トヨテックはラベル・パッケージのほか製本や建装材といった事業分野向けに、自動機器の開発・製造・販売およびメンテナンスを行う企業。近年は輸入商材の販売とメンテナンス、印刷資材も提供している。

ラベル向けの同社抜き加工機はシートタイプのカッティングプロッタがメーン。ロール・ツー・ロールタイプは当該モデルが3機種目で、既存モデルはグラフテック製のカッティングプロッタを搭載していた。

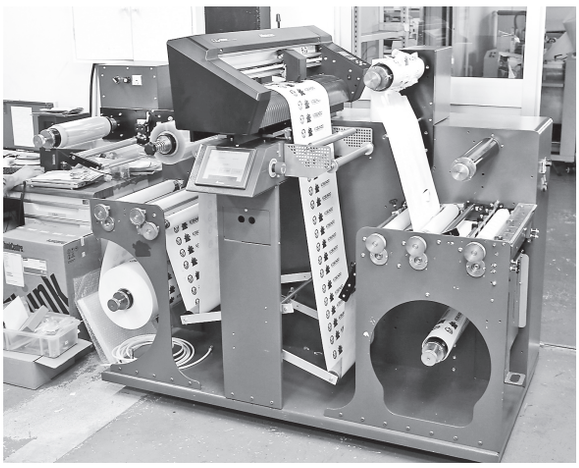
新たにラインアップに加わった「DGR−350／Plus」は、ミマキエンジニアリングのカッティングプロッタ「CG−60AR」を搭載した機種。

主な機能について、標準搭載するラミネート加工の後にトンボをセンサーで検出してメディアの搬送とカットを行う。またバーコードを読み取ってPCからカットデータを自動取得。連続した異なる出力物に対しても的確に連続カッティング処理が施せる。

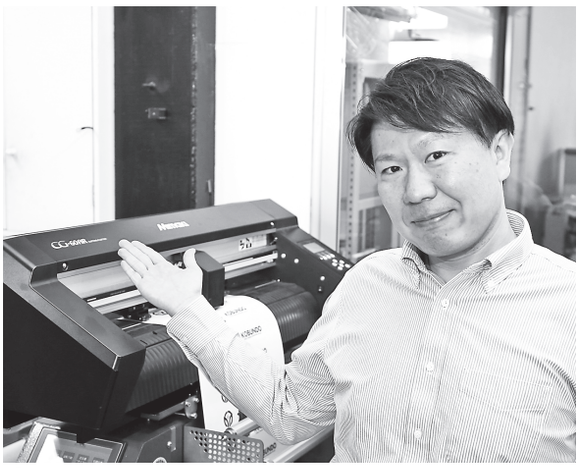
なおカットは半抜き以外に全抜きやミシン目も施せるほか、粘着ロールについては巻き上げかシートカットのいずれかを選択可能。ほかにも、カッティング後にメディアの両端をスリットして巻き上げることも。

同機のサイズは標準モデルが1270(W)×1037(D)×985(H)ミリ、Plusが1550(W)×1035(D)×1060(H)ミリ。処理幅は50〜350ミリまで、また処理速度は最大毎秒900ミリとなっている。

問い合わせは同社（☎04・7121・0755）。



ロール・ツー・ロールモデルの新型を発表



「極小〜小ロット加工機のトヨテック」を目指す豊田啓部長

ロール型プロッタ「DGR−350／Plus」を発表

〝加工機からデジタル化後押し〟狙う

加工機からデジタル普及を支援する気概 豊田啓部長コメント

ミマキエンジニアリングさんのカッティングプロッタを元々よく知っていた。ある時同社の方とお話しをする機会があり、協業を通じて双方にメリットを見いだしたことから、今回の運びとなった。

汎用性の高い従来のグラフテック製と、精細なカットも得意とするミマキエンジニアリング製。それぞれに特徴があり、カッティングツールも両社異なる。このことから、併売してお客さまの業容に応じて選択いただける形とした。

トヨテックでは「オンデマンドのトータルソリューション」を掲げて機器を提供している。シール・ラベル印刷業界においては〝小ロット・極小ロットの加工機といえばトヨテック〟というポジショニングを確立したい考えだ。新モデルの拡充でより窓口を広げ、小ロットの加工機として皆さまに幅広く選ばれたい、との願いを抱いている。

のみならず、この先は従来の極小〜小ロットを経て、より処理速度の高いモデルを拡充する構えだ。

プロッタに限らずすべてのデジタル加工機に当てはまることだが、近年のデジタル印刷機の開発速度に対して進化がない。われわれは常に課題と向き合い、マーケットニーズに合致する加工機のデジタル化に挑むとの気概を持つ。その一環として、加工の高速化についても重要視している。

市場ではますます小ロット化が進む。ぜひ当機をお選びいただきたいと考える対象は、自社で処理しきれず小ロットを外注してきたかたや、少量受注に消極的だったかた。小ロットを積極的に受注していく中で、大ロット受注の好機を見いだしていただけるはず。手ごろな価格帯の当機は、内製化を図って小ロット市場に順応していくきっかけに好適な1台だ。

トヨテックはこれからも、加工機から印刷のデジタル化を後押ししていく。